

# 日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

## 四糸金吾殿御返事

ぼんのうそくぼだい こと

## （煩惱即菩提の事）

新版  
1520  
〜  
1523

しじょうきんごどのごへんじ ぼんのうそくぼだい こと  
四条金吾殿御返事（煩惱即菩提の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい  
文永 9 年（'72） 5 月 2 日 51 歳 四条金吾

にちれん しょうなん おん 訪 いま ころざし  
日蓮が諸難について御とぶらい、今にはじめざる 志、

ころう  
ありがたく候。

ほけきょう ぎょうじや だいなん 遭 そろう 悔  
法華經の行者としてかかる大難にあい 候は、くやしく

思 そろ しょう 受 し そろ  
おもい候わず。いかほど生をうけ死にあい 候とも、こ

かほう しょうじ そろ さんあくししゆ そろ  
れほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候い

いま しょうじせつだん ぶっか 得 み  
つらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろ

ころう  
こばしく候。

てんだい でんぎようとう しやくもん り いちねんさんぜん ほうもん ひろ たも

天台・伝教等は、迹門の理の一念三千の法門を弘め給う

おんしつ なん 遭 たま にほん でんぎよう

すら、なお怨嫉の難にあい給いぬ。日本にしては、伝教よ

ぎしん えんちよう じかくとう そうでん ひろ たも だいじゅうはちだい ざす

り義真・円澄・慈覚等、相伝して弘め給う。第十八代の座主、

じえだいし みでし 数 多 なか だんな えしん

慈慧大師なり。御弟子あまたあり。その中に檀那・恵心・

そうが ぜんゆとう もう しにん ほうもん ふた わ

僧賀・禅瑜等と申して四人まします。法門また二つに分か

だんなそうじよう きよう つた えしんそうず かん

れたり。檀那僧正は教を伝う。恵心僧都は観をまなぶ。

きよう かん にちがつ きよう 浅 かん 深

されば、教と観とは日月のごとし。教はあさく、観はふか

だんな ほうもん 広 浅 えしん ほうもん

し。されば、檀那の法門はひろくしてあさし。恵心の法門は

狭 深

せばくしてふかし。

いま にちれん ぐつう ほうもん

狭

甚

今、日蓮が弘通する法門は、せばきようなれどもはなはだ

深 ゆえ か てんだい でんぎようとう ひろ

ふかし。その故は、彼の天台・伝教等の弘むるところの法

いちじゅうた い ゆえ ほんもんじゆりようほん さんだいじ

よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事と

なんみようほうれんげきよう しちじ しゆぎよう

はこれなり。南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すれば、

狭 さんぜ しょぶつ しはん じつぼうさった

せばきがごとし。されども、三世の諸仏の師範、十方薩埵の

どうし いっさいしゆじようかいじようぶつどう しなん

導師、一切衆生皆成仏道の指南にてましますなれば、ふか

深

きなり。

きよう い しょぶつ ち え じんじんむりよう うんぬん

經に云わく「諸仏の智慧は甚深無量なり」云々。この

きようもん しょぶつ じつぼうさんぜ いっさい しょぶつ しんこんしゆう

經文に「諸仏」とは、十方三世の一切の諸仏、真言宗の

だいにちによらい じょうどしゅう あみだ ないししよしゅう しよきよう ぶつぼさつ

大日如来、浄土宗の阿弥陀、乃至諸宗・諸經の仏菩薩、

かこ みらい げんざい そうしよぶつ げんざい しゃかによらいとう しよぶつ と

過去・未来・現在の総諸仏、現在の釈迦如来等を諸仏と説き

あ つぎ ちえ ちえ

挙げて、次に「智慧」といえり。この智慧とはなにものぞ。

しよほうじつそう じゅうによかじよう ほつたい ほつたい

諸法実相・十果成の法体なり。その法体とはまたなにも

なんみようほうれんげきよう しゃく い じつそう じんり

のぞ。南無妙法蓮華經これなり。釈に云わく「実相の深理、

ほんぬ みようほうれんげきよう しよほうじつそう

本有の妙法蓮華經」といえり。その諸法実相というも、

しゃか たほう にぶつ 習 しよほう たほう やく じつそう

釈迦・多宝の二仏とならうなり。諸法をば多宝に約し、実相

しゃか やく きようち にほう たほう きよう

をば釈迦に約す。これまた境智の二法なり。多宝は境なり、

しゃか ち きようちに しゃきようちふに ないししよう

釈迦は智なり。境智而二にして、しかも境智不二の内証な

り。これらは、だいじ ほうもん ゆゆしき大事の法門なり。

ぼんのうそくぼだい 煩惱即菩提・生死即涅槃しょうじそくねはん というも、これなり。まさしく

なんによこうえ なんによこうえ

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

唱

ぼんのう

男女交会のとき、南無妙法蓮華經となうるところを煩惱

そくぼだい そくぼだい しょうじそくねはん しょうじそくねはん

しょうじ しょうじ とうたい とうたい ふしようふめつ ふしようふめつ

即菩提・生死即涅槃というなり。生死の当体、不生不滅と

覚

ほか

しょうじそくねはん しょうじそくねはん

ふげんぎよう ふげんぎよう

い

さとりより外に、生死即涅槃はなきなり。普賢經に云わく

ぼんのう ぼんのう だん だん

ごよく ごよく はな はな

しよこん しよこん

きよ きよ

しよざい しよざい めつ めつ

「煩惱を断ぜず、五欲を離れずして、諸根を淨め、諸罪を滅

じよ じよ う う しかん しかん い い

むみよう むみよう

じんろう じんろう

すなわ

除することを得」。止觀に云わく「無明・塵勞は、即ちこ

ぼだい ぼだい しょうじ しょうじ

すなわ

ねはん ねはん

じゆりようほん じゆりようほん

い

れ菩提、生死は、即ち涅槃なり」。寿量品に云わく「つね

みずか

ねん

な

なに

しゆじよう

むじようどう

に自らこの念を作す。何をもつてか衆生をして、無上道に

い すみ

ぶっしん じようじゆ

え

ほうべんぼん

入り、速やかに仏身を成就することを得しめんと」。方便品

い

せけん

そう

じようじゆう

とう

こころ

に云わく「世間の相は常住なり」等はこの意なるべし。

ほったい

まった

よ

かくのごとく、法体というも全く余にはあらず、ただ

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經のとなり。

尊

ほけきよう

かこ

膝

下

かかるいみじくとうとき法華經を、過去にてひざのした

置

悔

嘸

におきたてまつり、あるいはあなずり、くちひそみ、ある

しん

たてまつ

ほけきよう

ほうもん

習

いちにん

いは信じ奉らず、あるいは法華經の法門をなろうて一人

きようけ

ほうみよう

続

ひと

あくしん

寄

をも教化し法命をつぐ人を、悪心をもつてとによせかくに

寄

痴

笑

ごしよう

勤

よせおこづきわらい、あるいは「後生のつとめなれども、

こんじよう 叶

差 置

まず今生かないがたければ、しばらくさしおけ」なんどと

むりよう

言

疎

ぼう

こんじよう

にちれんしゅじゅ

無量にいうとめ、謗ぜしによつて、今生に日蓮種々の

だいなん

遭

しよきよう

ちようじよう

おんきよう

低

置

大難にあうなり。諸経の頂上たる御経をひきくおき

たてまつ

ゆえ

げんぜ

ひと

下

もち

奉る故によりて、現世にまた人にさげられ用いられざる

ひゆほん

ひと

親

付

ひと

こころ

容

なり。譬喩品に「人にしたしみつくとも、人、心にいれて

ふびん

不便とおもうべからず」と説きたり。

と

しかるに、貴辺、法華経の行者となり、結句大難にもあ

きへん

ほけきよう

ぎようじや

けつくだいなん

遭

にちれん

助

たも

ほつしほん

もん

け

ししゅ

い、日蓮をもたすけ給うこと、法師品の文に「化の四衆、

びく

びくに

うばそく

うばい

つか

と

たも

比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を遣わして」と説き給う。



なか うばそく

きへん

誰

この中の「優婆塞」とは、貴辺のことにあらずんばたれを

指

ほう

き

しんじゅ

さか

かささん。すでに法を聞いて信受して逆らわざればなり。

ふしぎ

ふしぎ

にちれん

ほけきよう

ほつし

不思議や、不思議や。もししからば、日蓮、法華經の法師な

うたが

そくによらいし

すなわ

によらい

つか

ること疑いなきか。「則如来使（則ち如来の使いなり）」

似

ぎようによらいじ

によらい

じ

ぎよう

ぎよう

にもにたるらん、「行如来事（如来の事を行ず）」をも行

ずるになりなん。

たほうとうちゆう

にぶつびようざ

とき

じようぎようぼさつ

ゆず

たま

多宝塔中にして二仏並坐の時、上行菩薩に譲り給いし

だいもく

ごじ

にちれん

弘

もう

すなわ

じようぎよう

題目の五字を、日蓮ほぼひろめ申すなり。これ即ち上行

ぼさつ

おんつか

きへん

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

菩薩の御使いか。貴辺また日蓮にしたがいて法華經の行者

として諸人にかたり給う。これあに流通にあらずや。  
しよにん たも るつう

法華經の信心をとおし給え。火をきるに、やすみぬれば火  
ほけきよう しんじん 通 たま ひ 切 休 ひ

をえず。強盛の大信力をいだして、「法華宗の四条金吾、  
得 ごうじよう だいしんりき 出 ほつけしゆう しじようきんご

四条金吾」と、鎌倉中の上下万人、乃至日本国の一切衆生  
しじようきんご かまくらじゆう じようげばんにん ないしにほんこく いっさいしゆじよう

の口にうたわれ給え。あしき名さえ流す。いわんやよき名を  
くち 謳 たま 悪 な なか 善 な

や。いかにいわんや法華經ゆえの名をや。  
ほけきよう な

女房にもこの由を云いふくめて、日月・両眼・そうの  
にようぼう よし い にちがつ りようげん 双

つばさと調い給え。日月あらば、冥途あるべきや。両眼あ  
翼 ととの たま にちがつ めいど りようげん

らば、三仏の顔貌拝見疑いなし。そうのつばさあらば、  
さんぶつ げんみようはいけんうたが

じやつこう

ほうせつ

と

しゅゆ

せつな

くわ

寂光の宝刹へ飛ばんこと須臾・刹那なるべし。委しくはま

もう

そうろう

きようこうきんげん

たまた申すべく候。恐惶謹言。

ごがつふつか

五月二日

にちれん

日蓮

かおう

花押

しじょうきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事